

ネパールにおける体育教育の実情 (Ⅶ)

—— タルー族の生活と運動 ——

松岡重信
(広島大学)

はじめに

本報告は、これまでの報告と同様に研究上の明確な仮説に導かれているとか、焦点化された問題意識に基づいて行われているものではない。いわばフィールドワークとして現地に入り、あらかじめ意識的に観察しようとしたこと、必ずしも意識的ではなかったが強烈に刺激され、あわてて観察をはじめたことなどの記録と、現地で調達できた若干の資料を提示するとともに、そのことから表題のネパールの体育事情を考察しながら紹介する記録である。

あらかじめ意識的に観察しようとしたことは、これまで近づいていないヒマラヤ山岳地域の学校の様態と、そこに体育的現象・スポーツの現象が存在するか否かを確認することであった。予想されることは、学校は貧弱ながらも運営されているであろうが、体育的なあるいはスポーツ的な現象は、ほとんど観察できないであろう…と、いうものであった。今回1997年の8月の中旬にネパールへ入ったが、雨期の影響をさほど受けない地域(ヒマラヤ山岳地域)へのアプローチを試みるのが第一の目的であった。

今回も、ネパール教育文化省の研究機関であるカリキュラム開発センター(CDC)の副所長であるガジェンドラ氏¹⁾の支援を受け、そこから依頼された各機関のサポートを受けてのフィールドワークであった。また、先に現地入りしていて、途中から合流した長崎大学の金田女史²⁾らとともに計画を打ち合わせたのフィールドワークであった。が、この計画全体は、カトマンズ空港についた瞬間から吹き飛んでしまった。その主たる理由は、以前にも少しレポートしたが、政治的に「王室保守派」と、共産党をはじめとする「野党改革派」の勢力がほぼ拮抗していて、ゼネラルストライキに突入した直後の入国というタイミングの悪さがあった。あらかじめフィールドワークを予定していた地域や日程が、大幅に変更を余儀なくされた。予定の行程の前半は、金田女史のワークを中心に組み、後半は松岡のワークを中心に組んでいたことになる。

そして結果的にいえば、筆者の第一の目的は、後半

の日程で、ポイントの異なる山岳地域近くまで近づいたが、ほとんど果たせず、逆に前半の金田女史のワークの日程と場所で、重要な体験をしたことになる。それは、ネパールでもべールにつつまれているとされるタルー族の生活を若干でも観察したことによる。それらを中心に幾つかの視点から整理し記録しておく。その視点とは、1) 南部タライの部族生活と運動様態、2) 北部山岳農村地域の学校と体育現象、3) 国内スポーツ記録と学校のかかわり、の3点である。

I. 南部タライの部族生活と運動形態

南部タライのビルガンジーという街に向かう飛行機便の予定の変更を余儀なくされて、ナイトバスでネパールガンジーに向かうことになった。前回同様、長くて辛い旅であった。真夜中中バスに揺られて、次の日の明け方6:00頃、ネパールガンジーのバスターミナルに着く。

ネパールガンジーの商店や、公的事務所の開く時間帯を待って、ユニセフの国内下部機構の1つというCSAC(シーサック: Centre for Social Awakening Campaign)の事務所を訪ね、協力を要請した。むろん、事前にカトマンズからの協力要請も行われていた。ここで、タルー族の村落に入ることに、そして2日間滞在して、生活様式や食事調査をすること、移動のためのジープとその運転手に、通訳・案内役として若い男性と、女性の2名(Mr. Kapil Dev Sharma & Miss Kiran Pant)が付き添ってくれることが決まる。ネパールは、公用語としてネパール語を位置づけ、教育もしているが、約40語程度の地方または部族特異語がある。そして、日程は異なったが、これは金田女史の予定の後半にあった行動である。

1) タルー族の生活様態の概要

ネパールガンジーから約50kmの位置にあるティティリア村(Titihiria村、人口6,300人)という地区の1つの村落を訪問した。この地区には小学校5校(この地区だけの生徒が通う)と中学校1校(5つの村落からの子どもが通う)に高校(3つの村落から子どもが

通う)が1枚あるという。

幹線道路から一步協道に入ると、いわゆる村落の生活道路に入るが、周囲はこの時期まだ植えて間もない稲作か、1メートル半ぐらいに伸びたトウモロコシの畑である。雨期のため、ジープが道のぬかるみや田圃に入り、動けない状況になった。ジープをあげるために村人や子ども達が協力してくれるが、田圃にはまりこみ、燃料タンクに傷がついて燃料が漏れ出す始末。おまけに、車輪を空転させたためか、ついに後輪がパンクしてしまう。運転手は怒るし、田圃の持ち主の女性は大騒ぎするし、泥が飛び散って、一時どうなることかとものごく緊張した。もちろん筆者も泥まみれである。

そして結局、幹線道路から村落まで4人で歩くことが決まった。その時、どういう会話の果てか、引き上げ作業に協力してくれていた一人のバイクをもった人間が筆者を送るという。一番重い荷物をもって、荒れ道を守るバイクにしがみついていたところ、どうも村落の中心部と思われる個所にバイクを止め、ここで待つという仕草で本人は消えてしまった。筆者は、あとの連中3人がこの場所まで来るには1時間以上はかかると推測したが、そこに次々に村人が集まってくる。およそ、大人も子どもも含めて5~60人以上は集まってきた。日本人など珍しいのか、言葉は一切通じないが、「ここで休め」「水をのまんか」とばかりに面倒を見てくれる。英語で苦勞するなどという馬鹿げた努力をやめて、長老と思われる人物に身振り手振りで話すと、通じているのかいないのか、ともかく対応してうなずいたり、笑ったりしてくれる。そんな時間が小1時間続いて、当方も疲れ果ててきた。彼らは、筆者を取り巻いたまま何やら騒いでいるし、次々に入れ替わって小生を眺めていく。筆者は、ほとんど「見せもの小屋」の「猿」状態である。後続の3人部隊はこないし、ほとんどパニック状態でハンモック式のベッドに休んでいた。このハンモック式ベッドというのは、強い縄を編み目に組んで、木枠に結いつけてあるだけであるが、軽くて運びやすく風通しもよく、実に快適につくられている。

このタルー族の村には、電気はきていないが、高圧電線の鉄塔は少し離れてみえる。後で確認できたことは、送電鉄塔の下の村落に電気がこないのは、要は政治力のある人間とのパイプがないために放置されたままということらしい。水は、手押しポンプで割合この時期豊かに汲めるが、原則的にわれわれにはのめない。そのために街でペットボトルの水を6本購入して運び込んだが、これが日本人2人で、口にできるすべての水であり、しかも2日分である。豊かに汲まれる水を

気持ちよさそうに飲む現地の人々に比べて、餓えたひもじい想いもあった。

村落の中心部に取り残されて、約1時間が経過したとき、筆者の心理状態はパニックの極地にあったが、われわれのガイドの青年が自転車をもってきてくれた。彼は、お世話になる家とはここではなく、もっと手前の民家であると筆者を案内してくれた。自転車に荷物をくくりつけ、歩くこと約30分で訪問先ようやくたどり着く。他の女性連中2人は、現地でもとれる果物をほおぼりながら大笑いしている。昼間の気温が摂氏38度近くあり、歩くだけで汗がわき上がってくる。完全にバテていたし、昨夜は眠っていない。食欲もあまりなく、上着はドロまみれ、下着も何も汗でグショグショ、着替える場所も見当たらず、筆者自身の体調が崩れている…という自覚があって、強烈な恐怖感があった。

金田女史は、しばらくの休憩をとった後、数軒の民家に聞き取りに出る。小生も通訳兼ガイドもこれに同行する。田圃のなかの畦道をつたいながら、ステイ先のご主人(Mr. Ravi Kumar Chydary)の案内で、隣家から訪ねる。急な訪問にもかかわらず、われわれを玄関の一番いい場所に座らせ、水パイプで煙草を吸っていた高齢(年齢不詳)の女性に対応してくれた。パイプを分解してみせてくれたり、家族構成の話の段階で、近所から聞きつけた子どもや大人もまじえて30人以上が集まっている。先の水パイプを使いながら、色々話を聞かせてくれた女性は、実はこの家の家族ではなかった。どの家屋でも、玄関口の広場には数頭もしくは十数頭の水牛が飼われており、これと田畑が財産の主たるものである。自給自足体制が明確によみとれる。

水牛は小屋の下に繋がれたり、餌場に繋がれている。鶏やアヒルは親も子も走りまわり、犬もいるがすべて放し飼い状態で、人間の子どもの5才以下ぐらいの子どもは、腰ヒモ(宗教上の意味)を巻いているだけで、ほとんど裸である。これには、皮膚病から子どもを守るという積極的意味があるという。また、家族数も10~15人程度は普通という。われわれの訪問先も13人家族であったが、家の造りは玄関土間から4つに、穀物を入れた大型の瓶で仕切られた部屋がある構造になっている。うち一室が台所としてつかわれ、3組の若夫婦の兄弟家族と、老人が同居していることになる。プライベートも何もあったものではないが、これが現実の生活である。長兄の夫人は、5回流産して、子どもがいけないという。そして、その長兄が家長として振るまわって、われわれに対応してくれた。食事には本人が自ら立ち会ってくれ、「あれを食え、これを食え」と勧めてくれる。鶏が1匹つぶされて、いわば「最高の振る舞い」といえるものであった。ただ、筆者は体調がよ

くなく、食欲も余りなかった状態で、戻しそうになるのを耐えていた。ただ、食事のあと水牛のミルクを熱く温めてくれたものが出され、これは実においしく、少し体調の回復を感じるものがあった。土間に、先のハンモック式ベッドが4脚並べられて、ランタンの明かりを8:00頃消して、眠りについたが蚊の攻撃が強烈に厳しい。持参していた蚊取り線香を数本たいていたが、全くおさまらず閉口していると、気にしてくれたらしい家長の計らいで各ベッドに蚊帳が取り付けられた。これは、多分家族が使う分をわれわれの為に提供してくれたと思われる。

2) トイレ問題が大問題

よく眠ったような眠れなかったような一夜であったが、夜があけて7:00頃起き出すと、家族は既にそれぞれに仕事にかかっている。ガイドや家長が、川に行こうというので、ついて行くと、この川原でトイレをするように指示がでる。片道約20分のトイレ行きであった。筆者自身、既からだから異臭がたち登っているような状態であったし、オープントイレは何度か経験もあったので、適当な場所を捜したが、一面の砂原と、水牛の群が近くにいて身を隠す場所がない。牛の見張りの人間も何人かいたが、砂に穴を掘って割合悠々と便をすませた。誰もそれを不思議と思わぬ世界がある。

ガイドの青年が言うのには、このタルー族の村ではトイレ問題が最大の問題と指摘する。往復40分のトイレに体調を合わせるのはなかなか難しい。小便はどこでも済ませるが、大便となるとそれなりの施設や仕

掛けを必要とする、…と思っていた。が、屋敷をみわたしても、それに該当する建物や衝立のようなものは目につかないことに改めて気づく。家屋の周辺で、用便しないのはそれなりの生活の知恵があって、赤痢などの疫病対策ともいう。それにしても、水牛は繋がれている場所で、糞便の垂れ流し状態であるし、蠅の数もおびただしいものがある。マカ不思議の世界といえればそれまでの話であるが、度胸と諦めの必要な旅の始まりであった。

3) 突然の訪問者

次の朝、もう既に気温は30度を超えている。幹線道路まで約1時間かけて歩く。ジープと運転手は既にまわってくれていたが機嫌がよくない。ガイドと運転手が打ち合わせただけで、2時間近く幹線道路をもどって、別の村落を目指していた。あるバス停に数人の人だかりがあるところで、老婦人とガイドが話して何やら交渉成立、われわれはそのバス停からほど近い村落の入り口にある民家に案内された。さすがに昨夜からの強行軍でガイドたちも疲れ、この別の村にもう一泊することを嫌がっていたが、女性ガイドだけは残ってくれた。男性ガイドは、別の予定がある(?)とかでジープで帰ってしまう。

そのバス停で案内を請け負った老婦人は、民家にわれわれを預けて去ってしまう。小さな農家で、家族は4人、約20年前に中部山岳地帯から引っ越してきたという。水牛が10頭ばかりに、畑が少しあるという。ここは村の入り口で、色々な人々が寄っていたり、お



写真1 2泊目の寝床(小屋の二階)

茶をのんだりで一種の社交場のような役割を果たしているらしく、主人はそれを余り好ましく思っていない様子である。突然の訪問者のわれわれに、ひどく驚いていたが2人の娘さん(小学生と高校生;間もなく結婚する年齢という、一般にネパールでは20才までには男女とも結婚するという)が、なついてくれたせいか交渉は成立、一泊させて貰うことになった。10日以上も前から風邪気味だという婦人に風邪薬を提供したが、これは市販のもので、医師から調達してもっていった分はきき過ぎる可能性があると言うことで渡さなかった。診療所は10km程度はなれた町にあるが、金もかかるし、一般的には祈禱師に相談してからというのが手順らしい。

宿舎は、水牛小屋の二階の吹きさらし部分(写真1)であったが、ここは日陰の涼しい風が吹き込んで、最高の寝どこであった。畑の真ん中に共同の手押しポンプがあって、そこで素裸になり頭から水をかぶり、からだも4日ぶりに洗って、着替えもした。生き返った…と、いう感覚であった。

金田女史と女性ガイドは、夕方村落にインタビューに入ったが、その時間帯筆者は全く眠り込んでいた。突然の訪問者のわれわれに対してここでも丁寧な扱いを受けた。ここでも食事にはご主人がたちあい、娘や奥さんがこまめに世話をしてくれる。牛小屋の二階も、普段は家族の寝所と思われ、その最高の場所を提供されたことになる。食事にたかる蠅のすごさには閉口したが、2日ぶりに食欲を回復していたせいか、すごくうまい食事であった。米と豆を主体としたダルバードで、やはり水牛のミルクも出た。

村人が何人もわれわれを覗きにきては、家族と話し込んでいく。ここも電気はきておらず、持ち合わせの懐中電灯だけが移動の頼りであった。夜が少しふけると、全くの漆黒の真っ暗で、水牛が動く音以外に何も聞こえない…不思議な感覚であった。が、40年まえの筆者の中に残っていて、全く想い出すことのなかった生活の過去の部分が、ネパールで浮かんできたりして、実に不思議な感覚であった。

4) ここに体育・スポーツ?

本来の筆者自身の目的ではなかったが、強烈な生活体験であったことだけは間違いない。学校も3校見学した。われわれが、宿泊した民家から1kmの地点に小学校があった。小学校5年生までの子どもが35人在籍

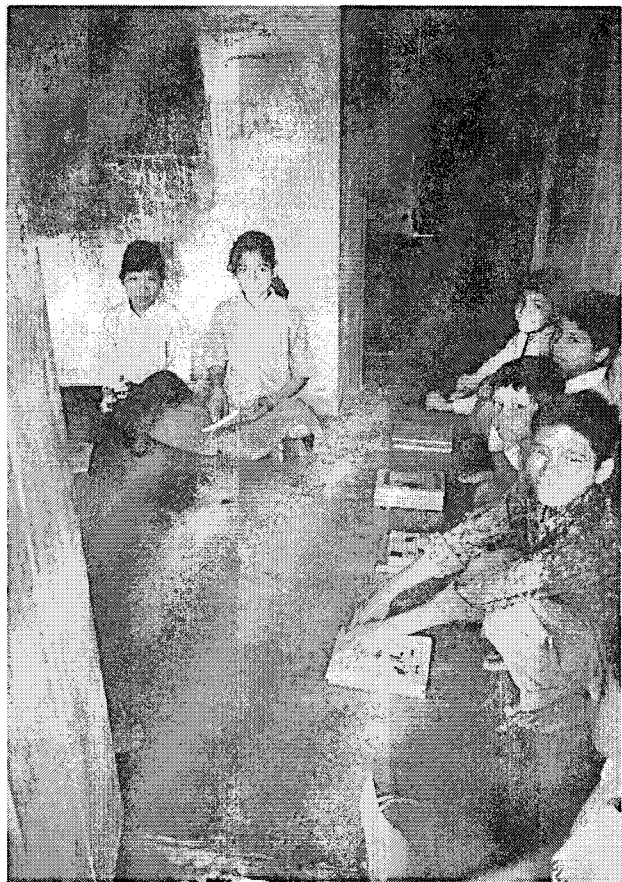


写真2 机も何もない学校

しているとのことであったが、教師は30才ぐらいの男性ひとりできりもりしている。建物こそあるが、机も何もない(写真2)学校であった。

帰途立ち寄ったクスムという村で、バス停近くの高校1校(生徒数461名、教師数12名)にバレーの支柱らしきものをみたが、この季節日向で人々が活動すること自体少ない。歩く、自転車に乗る、荷物を運ぶなどの生活的運動は、それでも見かける風景であったが、スポーツのかけらも観察されない。それらしき場所も観察できない。2泊目の家の娘達も学校で何もしていないと言う。考えてみれば、少しでも動くことが辛いこの地のこの季節のこの時間に、何をみようとしているのか…と、大いに反省する。

II. 北部農村地域の学校と体育現象

1) 二度目の行程変更

本来の予定では、ネパールガンジーより、飛行機で一気に山岳地帯に飛ぶ行程が予定されていた。ここで、カトマンズからかけつけてくれたガジェンドラ氏と合流、宿代でもめたり色々あったが、次の日の朝4:00

起床、ストライキのため先日より確認していた赤十字の車両で空港に向かう。軍人や警察官の姿がやたら多く、ものものしい雰囲気の中で午前6:00に空港着、7:10発のロイヤルネパール航空の国内便に乗る手はずであった。その時間帯にあった説明は、「パイロットが来れなくて飛べない…!!」空港職員もほとんどのない状況で、今度は空港を離れる手段がない。全く動けなくなって弱っていたところ、空港に来あわせた警察の車両にガジェンドラ氏が交渉、ネパールガンジーのバスターミナルまで警察のマイクロバスで送ってもらう。デモ隊が厳しくて、ネパールガンジーの街には入れなかった。

バスターミナルには、食堂やみやげもの売りの屋台(小屋)がたくさんあるが、ここに50名程度のデモ隊が出現、商売をしている店の戸口や道具を棒でたたき割り、石を投げて営業妨害する。最も、ほとんどの店は戸口を閉めているが、戸口を潰された店も3軒あった。一種の暴徒と化した若者の集団にも、30年ほど前の大学紛争時に何かダブルものを感じながらも、かなりの恐怖を覚えた。そして、午後2:00すぎに歩いて市内に入り、その日は安宿を捜して宿泊し、今後の行程を組み直した。明朝のバスでカトマンズにもどり、カトマンズから北方の山岳方面に向かう予定を組んだ。午前4:00から歩いてターミナルへ向かい、午前5:00のバスにのり、カトマンズに向かう。また、400kmの長いバスの旅であった。

2) 北方の山岳地帯の田舎町

次の日、天気清明なれど予定不明、ガジェンドラ氏宅で策を練り直し、12:30のバスでドチェという山岳地帯の村をめざす。その道は、カトマンズの市街地をぬけるあたりからほとんどが急峻な峠道で、6時間かかってドチェの手前40kmのトリスミという村でバスを下りる。もうバス便はないし、通るトラックもほとんどない。ここで宿をとるか、通りかかる車に便乗するかである。ガジェンドラ氏は、ドチェまで行くべきだと言い張る。だが、ガジェンドラ氏に金田・松岡の3人の乗れる車となると、来るか来ないかも見当つかず、結局、物売り達が利用する安宿をとる。その安宿、窓には鉄格子がはめられ、ほとんど「牢獄」の雰囲気であるが、ここには電気が来ている。しかし、ここでもトイレは、川土手であって、その近くで近所の女将さん達が洗濯していたりする。

3) 祭礼の一場面

この地域一帯が祭らしく、「鬼」の面をつけた若者が車を止めては、金の寄付を求める。途中の村でも、

「象の張りぼて」でバスの通行妨害をうける。こうした寄付を求めるといった風景が祭り故によく見られた。ヒンズー教の重要な祭礼らしく、村々での人出が相当のものである。笛にタイコや鐘の音もかなり独特のリズムを刻む。あふれかえるような人々の喧噪が、ものすごいエネルギーとして道々にあふれている。「鬼」や「象」を子ども達が追いかける。こうした風景も筆者のなかに昭和20年代の原風景として記憶にある。なんとも懐かしいものを感じた。

この祭りで、一帯の学校が休みになっていると聞いて愕然となる。明日も休みだという。何をするために来たのか…という気持ちも少しはあったが、それはそれなりに新しい発見もあった。この村には、日本人の支援が入っていることも知った。われわれが泊まった宿の女主人によれば、アベなる人物・ニシムラなる人物(ソロブチミスト、84才の医師)が支援に入っていて、孤児院を開いたり、学校に水道を造ったり校舎を建てるという支援を行ってきている。ニシムラ氏は、20年以上もこの村に通っているとの事であった。

その支援を受けている学校は、ニラカント高校と呼ばれ、約700名の生徒と21名の教師からなっており、うち3人の教師が体育教師のトレーニングを受けているという。そして、バレーや卓球はよくやるという。また、男子生徒はこうしたスポーツ的な活動を好むが、女生徒は全然アクティブではないと、行き会って案内してくれた校長が説明してくれた。事実、バレーの支柱らしきものや、コンクリ製の卓球台を観察できた。が、それらは、苔むしていたりで、さほど使われているような雰囲気でもなかった。

III. 国内スポーツ記録と学校のかかわり

今回のフィールドワークと直接関係しないが、ガジェンドラ氏から別れ際に競技の国内記録の集計された資料を入手した。入手したものは、1994年3月に整理された陸上競技関係の資料である。やや古いが、ネパールの陸上競技連盟は、1947年に結成され、Nepal Amateur Athletic Association (NAAA)として、日本の陸上選手権大会(もしくは国体)に匹敵する大会を行い、時折ない状態(NO COMPETITION)も含みながらも30回大会を超えている。

ガジェンドラ氏や DEEPAK DHOJ JOSHI 氏が、国内の実務的総責任者と思われ、組織的にはどうか理解できていないが、バレーボールやサッカーとともに結構盛大に行われている。高校生大会(日本のインターハイか?)もこれらの種目に限っては開催されている。その競技水準は表1からある程度類推できるであろう。ほとんどの学校に、直線走路100mなんて絶対とれな

表1 陸上競技の主要種目のネパール国内最高記録(抜き出し)

競技名	選手名(男子)	男子記録(記録年, 場所)	選手名(女子)	女子記録(記録年, 場所)
100m	Suresh Pandey	10.78(1990, 北京)	Puspa Bhatta	13.20(1984, カトマンズ)
200m	Asha Ram Chaudhary	21.70(1990, カトマンズ)	Manju Srestha	27.96(1989, バンコク)
400m	Asha Ram Chaudhari	48.32(1980, 北京)	Kamala Prasai	1.02.50(1966, バンコク)
800m	Dhani Ram Chaudhari	1.50.71(1993, ダッカ)	Raj Kumari Pandey	2.11.50(1989, イスラマバッド)
1500m	Gop Bahadur Adhikari	3:46.63(1993, ダッカ)	Raj Kumari Pandey	4:34.47(1990, 北京)
5000m	Hari Bahadur Rokaya	14:34.43(1987, シンガポール)	Raj Kumari Pandey	18:23.99(1988, シンガポール)
マラソン	Baikuntha Manadhar	2:15.03(1987, カルカッタ)	Raj Kumari Pandey	3:10.31(1988, ソウル)
走高	Lok Bahadur Adhikari	1.88(1993, カトマンズ)	Tanuja Dhakal	1.38(1987, ポカラ)
走幅	Dhan Bir Chaudhari	6.90(1989, イスラマバッド)	Usha Karna	5.04(1987, バンコク)

出典: ATHLETICS (10AllTimeBestRankinginAthleticsupon31March1994)

従って、この記録は1997年では更新されている可能性はあるが確認できていない。

い状況が背景としてある。

そして、学校がものすごくこうしたスポーツの能力の形成に貢献しているかとなると、一部の例外を除けば、ほとんど貢献する余地も能力ももたないと断言してよい。教師たちが、脚の速い子どもを大会につれていく、そこで競技のルールややり方を指導しながら、大会も運営する。こうした大会を支えてきた相当の部分に、日本人の海外協力隊などのスタッフの経験や力が読みとれる。特に「体育隊員」または「スポーツ種目隊員」として、学校や地域の教育事務所所属でボランティア活動を行ってきた若者たちの影響は大きいといえる。

大会は、学校の教師たちを中心に運営されているし、その教師達を指導したのが各国からのボランティアである。ナショナル・カリキュラムに示される「体育」という「教科」は、ほとんど地方には位置づいていない状況があるが、純粋にスポーツの部分は、まだまだ極々一部とはいえ、徐々に組織化される傾向が感じられる。

IV. まとめ

今回のフィールド・ワークのように、例えば予約を受け付けている国内便の飛行機が、天候とか気象条件によるのではなく、「パイロットが来ない」「飛行機が回送されていない」とかで欠航になってしまうのは、はじめての経験である。われわれも、こうした調査のための入国には、政府機関の援助を受けないと何もできないことは理解していたが、交通機関になると話は異なる。習慣や組織的・社会的成熟度の異なる国を訪ねて何より困惑することは、従って、今回のように必ずしもゼネストのような状況でなくとも、ありがちなことであるというポイントに集約されている。

特に山岳地域への道路が、土砂崩れなどで不安定な雨期の季節は飛行機以外に頼る脚がない。結果として、当初もくろんでいた地域へも近づけないままフィールドワークは終わり、当初の筆者の目的は半分も果たしていない。が、タルー族というインド・アリア系の種族のみが生活しているエリアに入れた経験は、本来

の筆者の目的にはなかったが、実に貴重な体験であった。

タルー族でも近代文明の流入で、著しく変容しつつある地域もあるとの事であったが、ここティティリア村では伝統的な生活が素朴に継承されている…と、感じた。婚姻や食糧・家屋構造…生活用具(下駄・網・穀物保存の大型の壺 etc.) 家族関係も、印象的であった一部しか報告していないが、まさに「生活の知恵」と「貧しき故の組織や伝統」を感じた。対外的には家長が実権を掌握し、家族をリードしている。自給自足のための体制、必ずしも豊かでないから、逆に大家族で村落を形成し、さりげないが相互理解や相互扶助の機能が作用している。

対極的に、日本がこうしたものを豊かさの追求において如何に簡単になくしてきたかを感じる旅でもあった。家族相互の振るまいや、村の長老格のような人間の影響、もめ事の処理などが、問題は様々にあるのであろうが、人間くさい「かかわり」のなかに明確に位置づいている。

ネパールは、国土のどこもが間違いなくネパールなのであるが、われわれは「ネパールの中のネパール」をみた…という、誇らしげな気持ちもある。そして、教育文化省のガジェンドラ氏のみならず、警察にも赤十字にもユニセフにも世話になり、保護された旅でありながら、強烈な印象と恐怖や驚愕の連続であったことも付記しておきたい。

今は無性に懐かしい想いもあるが、当時関西空港に無事に帰国できたことが不思議な気さえしていた。そして、帰国してから下痢をおこしていた。

注

- 1) Gajendra Lal Pradhman ;ネパール教育文化省の研究機関カリキュラム開発センターの副所長で、体育・スポーツ・衛生担当、1990年以降3回来日している。
- 2) 金田英子;長崎大学熱帯医学研究所所属、過去海外青年協力隊体育隊員として、ネパールのポカラを中心に活動した経験の持ち主である。